



樋口一葉の研究

著者	笠間 はるな
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第18247号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00123846

【博論要約】

樋口一葉の研究

東北大学大学院文学研究科文化科学専攻国文学専攻分野

笠間 はるな

本研究は、樋口一葉の小説テキストを明治二十年代の小説表現の諸問題との相関の中で分析することを通して、一葉の小説表現の固有性と同時代性的位相を明らかにすることを目的とする。

樋口一葉は明治期の女性文学を代表する作家として文学史上に名を残しながらも、その一方で、同時代文学の主流に対して傍流に位置づけられる傾向が顕著であった。一葉は、前近代の文学の流れを汲んだ文体と雑誌『文学界』との交流に代表される近代作家としての側面との間で、「中間的」な存在として長く認められてきたといえる。しかしその具体的な文学史的位置の検討は十分になされておらず、個々のテキスト解釈の枠を超え一葉の文学的営為の同時代的位相を体系的に明らかにする研究はあまり進められていない。一葉を特定の文学思潮やジャンルの中に位置づけることはたしかに難しいが、明治二十年という限定的な時期において展開された一葉の文学は、その時代の様々な小説表現との接触の中で生成された、まさに明治二十年代的な側面を、多分に有するものであると想定される。一葉の小説表現の時代的位置を問うことは、同時代の文学的状况における一葉文学の固有性と可能性を解明する試みであるとともに、明治二十年代という時代の文学の諸相やそこにおける種々の文学的課題の照射にもつながることが見込まれる。

以上のような問題意識に基づき、本研究では、一葉文学の展開を発表時期や共通するテーマに即して以下の四期に区分し、各テキストにおける表現の具体相を分析するとともに、その表現の生成にいかなる同時代の文学状況が

関与しているかを考察した。第一章は初期小説を対象に一葉文学初発期の文学的関心の所在を検討し、第二章では一葉文学初期の拠点の一つとなった雑誌『文学界』との交流を視座として、その相関性の痕を強く見せるテキストを取り挙げ、分析を行った。続く第三章では、明治二八年という時期に発表されたテキストにおける「狂気」の問題を、同じく明治二八年の悲惨小説・深刻小説の流行を視野に検討することを試みた。そして第四章では、第三章までの一葉文学の展開がどのような問題と結びついていくのかを、当時の女性文学の位相や会話体という形式の問題との関連から検討した。各章の成果は以下の通りである。

第一章 初期小説論―和歌的表現の展開

第一章では、一葉文学の「転換期」としばしば称される、初期小説の後半に位置するテキストを取り挙げ、検討を行った。本章で初期小説に焦点を当てた狙いは、一葉文学の基調をなす固有の小説表現および文学的関心の所在を照射し、以下の各章の前提を示すことにある。第一節では、「雪の日」の分析から、テキストの特質をなす表現として、歌語の多様なイメージの連関が自己の抑制を超えた衝動という心理的モチーフを形象化している点を指摘した。続いて第二節では「やみ夜」を取り挙げ、掛詞のレトリックを用いた内面叙述により、一義的に捉えられない主人公の心の様相が描出されていることを明らかにした。以上の考察から、一葉の和歌・古典文学の素養が初期小説において基調をなしており、その表現を通して一義化・言語化できない内面の描出が試みられていることを明らかにした。以上の二点の特質は、以降の一葉文学の中においても形を変えながら継承されていくものである。

第一節 「雪の日」論―連鎖する「雪」のテキスト

第一節では、「雪の日」(『文学界』第三号、一八九三(明治二六)年三月)を対象に、「雪の日」の構造とそこにおける歌語「雪」の機能を再考し、一葉文学の基底となる表現的特質の所在を明らかにすることを試みた。従来の

「雪」に關しての研究は、主人公の回想中の「雪」の意味性をとり出すことが中心となり、テキスト冒頭・末尾の「雪」も回想中の「雪」の解釈に準じて理解されてきていた。しかし、主人公を出奔に駆り立てた回想中の「雪」と冒頭・末尾の「雪」は同義的なものではなく、むしろ複数の意味作用を有した「雪」の連関によつて織りなされるゆるやかな枠組みを有したテキストとして、「雪の日」の構造を考えることができる。「雪の日」は同時代のいわゆる「懺悔物語」と構造的共通性を有することが従来指摘されているが、過去から現在までの来歴を因果的に語り出していく懺悔物語との差異として、このゆるやかな「雪」の連関構造の固有性を看取することができると指摘した。以上のテキスト分析を踏まえ、テキストの構成原理として歌語を多義的・連関的に機能させていく「雪の日」の手法が、一葉の固有の文学表現の初発の地点として位置づけられると結論づけた。

第二節 「やみ夜」論―「女夜叉の本性」の揺らぎ

第二節では、「やみ夜」（『文学界』第十九・二一・二三号、一八九四（明治二七）年七月・九月・十一月）について考察した。本作は一葉の社会批判意識を反映させたテキストとして解釈される傾向が強固であったが、「女夜叉の本性」と形容される主人公の内面は、社会批判という一義的な解釈に収斂されない多義性を有している。本節では、未定稿の改稿過程の分析を主な方法として取り入れながら、主人公の内面表象に歌語や掛詞のレトリックが機能していく様相を分析し、テキスト解釈の再考および一葉文学における和歌的手法と内面表現との関係性の解明を試みた。「やみ夜」において、掛詞を中心とする和歌的レトリックは、複数の文脈が非論理的に結合する言葉の多義性をテキスト内に呼び込み、独自の内面表象を可能としている。そのような内面表象の方法の獲得という点において「やみ夜」は一葉文学の中で重要な位置を占めており、このような内面表象のあり方に、初期小説から後期テキストまで通底する一葉文学の固有性の所在が見出されることを指摘した。

第二章 一葉と『文学界』

第二章では、「琴の音」(『文学界』第十二号、一八九三(明治二六)年十二月)「軒もる月」(『読売新聞』一八九五(明治二八)年四月三日・五日付)の二作における、雑誌『文学界』との関連性を検討した。明治前期浪漫主義の中心的役割を果たした雑誌『文学界』は、明治二六年・二七年頃の一葉の文学活動の拠点となった雑誌である。従来、一葉は『文学界』の浪漫主義思想を深く共有することはなかったとして、『文学界』の近代性に対して封建的・前近代的な作家と位置づけられる傾向が強かった。しかし、そうした従来の評価には、『文学界』同人の幅広い思想内容を北村透谷の思想に一元化したうえで一葉文学と照らし合わせていること、両者の関係性を『文学界』から一葉へという一方的な思想受容の図式で捉えがちであることの二点において問題が見られる。そこで本章では、『文学界』との関係性の痕跡が明瞭に見て取れる「琴の音」「軒もる月」を対象に、『文学界』と一葉の近接性と差異の双方を具体的なテキスト分析から明らかにし、『文学界』との接触が一葉文学に齎したものの内実を考察した。まず第一節では『文学界』の思想内容の基軸と広がりを観し、『文学界』における「他界」概念とそれに隣接する複数の文学的問題を検証した。続く第二節・第三節では、「琴の音」と星野天知、「軒もる月」と北村透谷の関係性を視座として、双方に共通する表現・モチーフを分析するとともに、そこにおける一葉テキストの固有の位置を探ることを試みた。以上のテキスト解釈を通して、一葉が『文学界』の思想を経由して見出した文学的課題の所在として、「実世界」(現実社会)への固有の視点の獲得、解釈不可能な人間の内面への着目という二点を明らかにした。

第一節 『文学界』と一葉―「他界」の周縁をめぐって

第一節では、『文学界』の思想の支柱のひとつである「他界」および「想世界」をめぐる言説を中心に、『文学界』同人の問題意識の諸相を概観した。『文学界』において、「想世界」に重きを置く思想は、様々な制約に満ちた「実世界」の認識や「人間の心」の人智を超えた複雑不可解な様相への注目に繋がるものである。一葉と『文学界』の

関係は「他界」の認識の深淺という観点で語られることが多いが、「想世界」の一領域である「他界」もまた、こうした一連の問題系の中にあるものと指摘できる。一葉テキストは「他界」「想世界」それ自体を中心化する性質は強くないが、「他界」の問題と不可分である『文学界』の社会観・人間観は、その後の一葉文学の成立に関わるものとして再考する余地があるといえると指摘した。

第二節 「琴の音」論―『文学界』と「百花爛漫の世」

第二節では「琴の音」を取り挙げ、『文学界』の思想との交渉の様相を、人間の「縄墨」からの「解脱」を論じた星野天知の評論を視座として明らかにした。本節ではまず、テキスト内の月光の表現を精査し、「琴の音」ではヒロインの弾く琴の音色が、星野天知の「解脱」の表現を下敷きとして描写されていると指摘した。しかし、天知の思想を重要なモチーフとして取り込む一方で、テキストは「世」からの「解脱」よりもむしろ「世」の中で生きていく人間の姿を描き、またそうした生が抱える「悶へ」という、天知の問題意識とは異なる生のあり方を同時に描出している。そのような差異の分析をもとに、「縄墨」「limit」からの脱却を志向する『文学界』とは異なり一葉は様々な制約がまわりつく社会に関わって生きる人間という存在を見据え続けたと指摘し、後期テキストへと続いていく一葉の人間の生に対する意識の形成において『文学界』との接触は重要な契機であったと結論づけた。

第三節 「軒もる月」論―北村透谷「心機妙変を論ず」への視線

第三節では「軒もる月」について、北村透谷「心機妙変を論ず」との相関性を明らかにするとともに、「心機妙変」というモチーフを視座にテキスト解釈の再考を試みた。テキストは独白体と「月」の機制によって主人公の激しい煩悶を描き出している。その煩悶が突然転換する結末部の表現に着目し、そこに北村透谷「心機妙変を論ず」を元にした表現が散見されること、結末部は主人公の「心機妙変」の瞬間を描き出していることを指摘した。そして、

「軒もる月」が「心機妙変」という合理的に説明できない人間の心理の動きへの関心を示すテキストであることから、そこに初期小説以来の一葉の人間心理への関心と『文学界』の人間観との共振を見て取ることができると結論づけた。『文学界』とは異なり「世」の中の生を見つめた一葉文学が「世」を生きる人間の心理のあり方として『文学界』の人間観に関心を寄せていたことは、一葉の文学の中に『文学界』の問題関心が深く息づいていることを示すものである。

第三章 一葉小説の〈狂気〉

第三章では、一八九五（明治二八）年に発表された二作「にぎりえ」（『文藝倶楽部』第九編、一八九五（明治二八）年九月）、「うつせみ」（『読売新聞』一八九五（明治二八）年八月二七日（三一日））を中心に、一葉テキストに描かれる「狂気」の固有性と同時代文学に対する問題の射程を検討した。その際に視点としたのは、明治二八年に流行が始まった「悲慘小説」と称される文学ジャンルとの接点である。まず第一節で悲慘小説を巡る同時代言説と具体的なテキストを取り挙げ、そこにどのような可能性が見出されていたのかを確認するとともに、悲慘小説の中で試みられた「狂気」という特異な内面状況の表象が、一葉の「にぎりえ」に通底することを指摘した。一葉の「狂気」の表現が確かな同時代性を有していることを前提として、続く第二節・第三節では、同時代の「狂気」表象の中における一葉テキストの固有の位置を探ることを目的に、「にぎりえ」「うつせみ」をそれぞれ分析した。そこから明らかになったのは、「狂気」の解釈不可能性をテキスト化するにあたって、従来の小説形式の固定的な枠組みを揺るがす構造が両テキストにおいてそれぞれ見られることである。一葉における「狂気」への志向は、同時代と軌を同じくする一方で、同時代小説の類型性や固定性を照射する固有の批評性を有している。

第一節 「にぎりえ」と悲慘小説のあいだ―明治二八年における「悲慘」の表象をめぐる

第一節では、本章が焦点を当てた明治二八年に誕生し「狂気」というモチーフを多用した「悲惨小説」というジャンルに着目し、「悲惨小説」をめぐる言説と「悲惨小説」に属するテキストの表現的特質を考察した。悲惨小説は、社会問題を描出する小説として期待される側面も有していたが、同時に、人間の抑制できない混乱を極めた内面の動きを積極的に織り込み「狂気」や「病」、「魔」と称される特異な内面の様態をクローズアップした実験的な心理小説としても、当時の文壇において注目を集めていた。そのような側面に注目し改めて一葉テキストに目を向けると、悲惨小説的性格を多分に有すると従来目されてきた「にぎりえ」の同時代性も、新たな視点から考えることができる。近年「にぎりえ」は下層社会への意識という点で悲惨小説やその周辺の文学者との接点を持っている点が目されている。しかしそうしたモチーフの共通性に留まらず、「にぎりえ」のお力の内面描写には、悲惨小説の「狂気」に広く共通する、特異な身体感覚の描写を伴う内面表現との近似が見られる。悲惨小説の「狂気」をめぐる小説表現の系譜の中に「にぎりえ」もその位置を占めており、明治二十年代後半の小説における新たな内面表象生成の動きの一つの核として、「にぎりえ」というテキストを時代の中に再定位することができると結論づけた。

第二節 「にぎりえ」論―さまよい続ける声

第二節では「にぎりえ」を対象に考察を行い、その小説表現としての固有の位相を明らかにすることを試みた。「にぎりえ」はお力の内面描写の強い迫力という点で評価が高い作品であるが、その内面描写を固有のものたらしめているテキストの表現的特質を説明することを目的に、本節では未定稿の分析と同時代の独白体小説との比較を取り入れながら、テキスト表現の分析を行った。未定稿からの改稿過程を分析していくと、「にぎりえ」決定稿の語りが一人称小説・独白体小説に近い枠組みを有していることが指摘できる。明治二十年代において独白体は屈折や錯綜を孕む内面表白を可能とする語りの機構として多用されていたが、「にぎりえ」のお力の言葉の特質も、そのような独白体的性格の中に見出すことができる。しかし「にぎりえ」が同時代の一人称小説・独白体小説と一線を画

しているのは、物語の語り手の位相やお力自身のあり方、さらに物語の結末の臙化といった三点に亘って、お力の錯綜した語りに対する固定的な意味付けを排除する仕組みが、テキスト全体を通して仕組まれていることである。お力の内面に関わる因果関係を成立させない「にぎりえ」の構造は、因果関係の構築と不可分の関係にある「物語」という形式との拮抗を見せるものであり、人間の捉えがたい内面を描くという一葉文学が向き合わねばならなかった重要な課題が、そこに示されているという。

第三節 「うつせみ」論―狂気を抱える「主人公」をめぐって

第三節では「うつせみ」における「狂気」の表象を分析した。同時代の「狂気」の表象を参照しつつ、雪子の「狂気」をめぐる表現の特質として、テキストが雪子の生きる内的時間の特異性を前景化させていることを指摘した。冒頭から一貫してテキスト内の現実のへいま・こことは異なる時空間を生きる主人公を設定した「うつせみ」は、明治二十年代の「狂気」を描いたテキストの中において特異な位置を占めているといえるだろう。さらに、そのような雪子のあり方によってテキスト中で前景化するのは、多様な解釈の言葉の集積としてのテキストのあり方である。雪子の「狂気」の言葉は一義的な意味に回収し得ない錯綜した様相を呈しており、それゆえその不可解さを巡る様々な推測・解釈の言動が、他の登場人物によって発せられていく。事実性が保証されない他者の解釈で雪子の狂気を圍繞する「うつせみ」の構成は、雪子をめぐる様々な物語の片鱗を引き出しながら、雪子の内面の解釈可能性を浮かび上がらせるのである。こうしたテキストのあり方に、特異な心理様態としての「狂気」を表象するための、「うつせみ」の戦略が看取されると結論づけた。また、以上のようなテキストの構造を踏まえて、「うつせみ」というテキストが照射する問題の射程として、テキスト全体を統括する基軸としての「主人公」という当時の小説概念の定型性の問題を指摘した。前節の「にぎりえ」とともに、「狂気」を題材とした明治二十八年の一葉の小説テキストは、「物語」あるいは「小説」という文芸形式が不可避的に内包する定型性を揺るがすテキストとして、文学史

上の意義が再考される必要がある。

第四章 一葉小説の展開

第四章では、一八九五（明治二八）年末から一八九六（明治二九）年始めにかけて発表された「十三夜」（『文藝倶楽部』第十二編「閨秀小説」、明治二八年十二月）「わかれ道」（『国民之友』明治二九年一月四日、付録「藻塩草」）を対象に、晩年に至っての一葉文学の展開の様相を跡づけることを目的として考察を行った。この時期の一葉テキストの特質として、「にぎりえ」などの先行テキストにおいて課題となった物語としての結構の整合性を志向する傾向が強いこと、そして家庭や夫婦といった特定の関係性を主なモチーフとして取り込んでいったことの二点を指摘することができる。それらの傾向はそれまでの一葉文学の展開からの断絶を感じさせるが、他方、同時代評に示されるように、明治二八年までに様々な形で形象化されてきた一葉固有の問題関心や表現の方法との接点をも、確かに担っていると考えられる。そこで本章では、最晩年の一葉テキストの新たな側面と先行テキストから継承された小説表現のあり方との双方を視野に、テキスト分析および同時代的問題の抽出を試みた。第一節・第二節では「十三夜」を取り挙げた。（上）（下）の二段構成をとる「十三夜」について、第一節では主に（上）における家族の齟齬の物語を「今宵」という時間を軸に考察し、続いて第二節では（下）により重点を置き、旧暦十三夜の「月」という情景が持つ当時の閨秀小説の小説表現との接点と、それとは位相を異にするテキスト細部の様相とを考察した。第三節では「わかれ道」を取り挙げ、登場人物の「会話」を前景化したテキストであるという表現的特質が有する問題を再考し、第三章までに見た一葉の小説表現との接点と展開を考察した。上記の二テキストの考察を通して、晩年の一葉テキストが古典文学的表現や独白・一人称的な語りという初期以来の方法を継承・発展させる中で成立していること、そしてその新たな展開の方向性として、内面的な差異・齟齬を抱えた複数の登場人物の言動が交錯する場としての小説テキストが志向されていたことが明らかにされた。

第一節 「十三夜」論（一）―齋藤家の「今宵」

第一節では「十三夜」（上）を対象に考察を行った。「十三夜」（上）について先行研究で議論が重ねられてきたのは、主人公・お関の離縁の決心がなぜ断念されたかという問題に関わる解釈であった。本節でも「十三夜」論の前提として（上）の物語内容の解釈を試み、テキストが前景化させている問題の所在を検討した。「十三夜」は旧暦十三夜の一夜を舞台に展開される短い劇であるが、お関の離縁の決心とその断念を読み解くためには、「今宵」と繰返し語られるこの一夜の持つ意味に着目する必要がある。お関の「今宵」は長い年月の我慢の堆積を背後に持つ時間として重い意味を持つが、お関の離縁への意志を宥める父親の言葉には、そのお関にとっての「今宵」の理解において大きな懸隔が看取される。その「今宵」の含意を巡る親子の差異あるいは齟齬の物語として「十三夜」（上）が成立していることを指摘し、お関と他者の共有しえない内面を描出していくテキストという、「十三夜」の基本的な性格を確認した。

第二節 「十三夜」論（二）―後期一葉テキストの「抒情」をめぐって

第二節では、第一節をふまえ、「十三夜」の「今宵」の問題を、テキスト全体を覆う「月」の「抒情性」という観点から改めて検討した。一葉テキストの中において突出した「抒情性」が指摘される「十三夜」であるが、そのようなテキストの性格は、通俗性や欺瞞性の発露として否定的に論じられる傾向が強い。しかし、秋の情景描写によるテキスト構成は、「十三夜」の掲載誌『文藝倶楽部』第十二編「閨秀小説」における女性作家のテキスト群との通底性を有しており、ひとつのメディア的戦略としての位相を担っていると考えられる。本節ではそのような「十三夜」と明治女性作家の小説手法との接点の中で「十三夜」における「月」の「抒情」を捉え直すとともに、その同時代的枠組みを有する本テキストが全体として備える固有の物語構造を説明することを試みた。「十三夜」がテクス

ト内部において様々な差異や齟齬を抱き合う複数の登場人物の内面を描き出していることを（上）（下）それぞれにおいて指摘し、登場人物間の多様な位相でのずれが顕在化する物語に全体的な統一性を担保する枠組みとして、「月」の「抒情」を再定位することができると指摘した。このようなテキストの構造は、一葉文学の展開過程と雑誌メディアとの関係という複数の面からの要請において生じた、この期の一葉文学の統一的な物語構想への志向性をうかがわせるものである。そしてそのような物語構想への志向は、自己の文学が置かれた位相の中で戦略的な振舞いとして、一義的な「抒情性」という規定に収まらない問題の射程を有していると結論づけた。

第三節 「わかれ道」論——一葉テキストにおける「独白」と「会話」

第三節では、「わかれ道」の特徴的な表現である会話体の問題を視点として、テキスト分析を行った。「わかれ道」は会話体を多用したテキストとして注目されてきたが、お京と吉三の「会話」には、独白の話し手と聞き手に近い構図を示している点に特徴が見られる。その特異な形の「会話」がテキスト内においていかに機能していくかを分析し、二人の固有の親密な関係の構築と両者の内面理解の齟齬とを同時に形成するという、双方向的な働きを持つものとしてこの「会話」が作用していることを明らかにした。そのうえで、テキストの結末における二人の関係の破綻が、二人の関係を構築していた言葉のあり方が内包する齟齬の顕在化によってもたらされることを指摘した。以上において明らかにされた会話体の独白的な様相は、独白体や一人称の語りを内面描写の方法として固有に展開させてきた先行する一葉テキストの表現的特性との関係の裡に捉えることが可能である。しかし「わかれ道」が一葉テキストの展開の中で固有の位置を占めるのは、その独白的な言葉が、他者と共有不可能な不可解な内面をのみ開示していくものとしてではなく、一面において他者との関係性の構築に寄与する側面をも有していることである。人物間の関係性に対して独白的発話をもたらす多方向的な作用が「わかれ道」を構成する骨格を為していることを結論として指摘し、「十三夜」と共に晩年の一葉文学のテーマとして、内面の齟齬や関係の共有といった、人物間の

関係性の問題が前景化していることを明らかにした。

* * *

本研究では、一義化・言語化し難い内面の描出という初期から後期までを貫く一葉固有の文学的関心の所在を明らかにしその表現的展開を追うと共に、そこに関わった同時代の文学状況との接触の様相を明らかにした。以上を改めて概括すると、本研究を通して得られた成果として、以下の二点を挙げることができる。

第一に、一葉文学の基底をなす文学的関心の所在として言語化・一義化不可能な人間の内面という問題を指摘し、その形象化がいかなる具体的な表現のもとに行われたかを精査したことである。人間の内面に深い洞察を見せる一葉文学のありようは先行研究においても注目されるものであったが、本研究の独自性は、その人間心理の様態への関心によって生み出された多様な小説表現を捉え、その生成と展開の様相を明らかにした点にある。本論文で触れた同時代テキストが示すように、言語化・一義化不可能な人間の内面への着眼それ自体は、一葉固有の小説モチーフというよりも、極めて明治二十年代的な文学的関心であったというべきであろう。したがって一葉文学が根底に据え続けた人間内面への深い関心は、小説モチーフとしての固有性として以上に、その表象のために試行された個々の表現のあり方の中においてこそ、一葉文学の固有性・批評性を獲得するものとなりえたといえるのである。

第二に、それらの小説表現の生成が、様々な同時代的要素との相関の中において果されたことを明らかにし、一葉テキストの同時代的位相を通時的に明らかにしたことである。浪漫主義文学の中心的雑誌『文学界』から大衆向け通俗雑誌『文藝倶楽部』まで、一葉テキストは多様な小説媒体と関係を有していたが、本研究におけるテキスト分析からは、その掲載誌や発表時の文学潮流を常に視野に入れ、柔軟に取り入れていった一葉文学のあり方が多様に導き出された。一葉文学と同時代文学との接点は、特定の流派に定位できるような固定的なあり方ではなく、明

治二十年代の文学状況やジャーナリズムと横断的・流動的に関わり合うものとしてあったのである。その中でこそ、一葉文学は新たな表現の可能性を摂取していったと考えられよう。すなわち、やはり小説表現という位相においてこそ、一葉は明治二十年代との密接な相关性を有した存在であったことが、明らかにしたのである。

以上のように本研究は、小説表現という位相において、一葉文学の多様な展開の様相と明治二十代文学としての位置および可能性を、総体的に明らかにしたことを成果の枢要としたい。